

**J** **apanese text**

2010年 秋/冬号 日本語編

**アート** **アーティスト・インタビュー**

撮影＝坂本正行、文＝白坂ゆり

**小谷元彦** — 幽体の知覚

p.115

水の流れは彫刻になり得ない。だが、アーティストの小谷元彦は、そうした不可能な命題に挑む。「三次元を表すデジタルメディアが発達し、彫刻は時代に取り残されていくようにも思われます。しかし、彫刻にするのは不可能だとされている領域を見ると、まだ彫刻の可能性が残されているように思えます」。

小谷は、彫刻を中心に制作する一方、彫刻の手法を取り入れた写真やビデオ作品なども手がけている。代表作に、滝のような映像に囲まれる鏡張りの空間作品「ナインス・ルーム」、やせ衰えた武者の騎馬像「SP4 the specter- 全ての人の脳内で徘徊するもの」、血のように赤い野いちごを握りつぶした少女を通して、掌に残る感触を表した写真作品「ファントム・リム」などがある。

1972年京都に生まれ、日本の伝統文化の概念と、サイコ・ホラー映画などの現代文化の概念や特殊効果を融合する独自のスタイルで、2003年のヴェネツィア・ビエンナーレなど国際展でも注目を浴びてきた。そんな小谷の、10年を超える制作活動からの作品と新作を一堂に展示する個展が開かれる。展覧会テーマ「幽体の知覚」とはなんだろう？

「現象や知覚など、目に見えないものを彫刻に表したいと思っています。例えばウンベルト・ボッチョーニの彫刻では、スピードという内在する力が可視化され、『ない』ものがそこに出現している感じがする。また、日本には古来、能や民話など、見えない存在を感じさせる幻視的な物語があります。僕は、彫刻とは、実体ではなく、影をつくることだと思っていて、そうした亡霊的な、気配のような存在を『幽体』と呼んでいるんです。例えば、英雄を表すはずの騎馬像は、小谷の作品世界では、皮膚を剥落させたゾンビのようになる。

京都育ちの小谷は、幼い頃から見慣れた仏像にも独自の視点を持つ。「仏像もね、経年変化に対し、修復して何度も甦らせるところが、ゾンビ的だと思うんです。人々が信仰し、畏怖を感じるの、仏像の形ではなくて、まつわりついている何かに対してだだと思うんです」。

また、「動き続けるものの一瞬をとらえたり、一つの作品のなかに複数の時間を多層化したり、時間を操作することにおいて、映像と彫刻は似ている」とも言う。垂直構造の、例えば滝は上から下までを一度に見られず、全貌がとらえられない。小谷は、人間がそのように見えない領域を見ようとする間(時間)に恐怖や崇高さを覚える心理を作品に応用して、「ナインス・ルーム」のような縦長スケールの彫刻や映像インスタレーションもしばしば制作する。見る者の潜在意識や触覚的な感覚を揺さぶる作品群を通じて、私たちの精神と身体の関係を見つめ直したい。

小谷元彦展「幽体の知覚」11月27日～2011年2月27日

■ 森美術館

東京都港区六本木 6-10-1 六本木ヒルズ森タワー 53F

www.mori.art.museum

上左・「SP4 the specter- 全ての人の脳内で徘徊するもの」2009年。繊維強化プラスチック 上・「スケルトン」2003年。繊維強化プラスチック  
 左・「ナインス・ルーム」4枚の壁に映像を投射、天井と床が鏡張りの一辺3.2mの立方体。2001年。本展には、鏡を使った八面体に拡張した「インフェルノ」が出品される。撮影＝木奥恵三

**皆川明** — ミナ ペルホネン展覧会「進行中」

皆川明率いるファッションブランド「ミナ ペルホネン」が創造するデザインは、手描きの図案から始まる。コンピュータグラフィックは使わず、鉛筆や絵筆などを用いて、想像力から生き生きと生み出された、葉っぱを広げた野の花、木漏れ日、鳥などの図案をもとに、国内外の工場や職人たちとともに、織り、プリント、刺繍といった手法でオリジナルテ

キスタイルを製造し、服をつくりあげている。

1995年、皆川の自宅兼アトリエにてブランドを設立。現在は、東京と京都にショップを持ち、服を中心に家具や器などの生活デザインへと領域を広げ、海外でも高い評価を受けている。ブランド名は、皆川が心の故郷と思うほど共感を覚えるというフィンランドの言葉で、ミナは「私」、ペルホネは「蝶」を意味する。その名の通り、小さな羽ばたきを続けることでいつのまにか遠くまで飛べるような軽やかさで、飛躍している。世の中がどんなにスピードや効率を求めて変化しようとも、時間と手をかけて創造する姿勢は変わらない。この秋、15周年を記念して展覧会が開かれる。

「展覧会名は『進行中』と名付けました。現在から過去を振り返るのではなく、過去からの延長線上に現在があり、未来に向かっていくような展示にしたいと思います。単発的に新しいことをするのではなく、一つつくり出したものからヒントを見つけて次に何をつくるのかを考える。そのような流れのなかで自ずとデザインの系譜ができ、生み出したものが相互に響き合ってさらに新しいクリエイションが生み出される。そんな循環的な手法を続けてきました」。例えば、ワンシーズンでデザインを終わらせてしまうのではなく、ストライプの色や形、素材などを変えてバリエーションを増やしてきた「マルチストライプ」シリーズのように、数年ごとにデザインを変革していく。展覧会では、このようにして生まれてきた図案や服などの作品が展示される。「年輪を重ねるように、普遍的なものを目指すブランドとしての生き方を提示したいです」。

子供の頃に感じていたことや大切に思っていたこと。服のテクスチャーや布の図柄などが「物語」を想像させ、人々に長く持っていたいという愛着を湧かせる。そこには、国を超えて人々の心に触れるものがある。2004年から度々パリコレで発表、英国のリバティなど、海外のテキスタイルメーカーともコラボレートしている。「最初は、海外ではどのような基準でファッションが評価されるのだろうかと思いました。『(僕たちが) 独自である』と言われたことで、日本であろうと世界であろうと自分たちが目指すものに向かっていけばいいんだと悟りました。ジャンルやカテゴリーにとらわれ

ず、多様な要素が混在するのが自然であるというスタイルも特有なのかもしれません」。

また、「ミナ ペルホネン」は、皆川個人のデザインに留まらず、世代を超えて活動が受け継がれていく「100年ブランド」を目指している。「15年経ったからあと85年ではなく、どの時点でも100年後の未来を見えています。個人の人生は有限ですが、人の思いには無限のポテンシャルがあると思いますから」。

「いいものをつくろうと共鳴してくれる人々の力によって、現実的な壁を乗り越えることがあります」と皆川が語るように、日々の小さな積み重ねや人々のつながりが原動力となり、時間や空間を超えていく。それが「ミナ ペルホネン」が見つめる未来だ。

(p.116 下)

「**minä perhonen fashion & design**」2009年～2010年  
 ミナ ペルホネンの15年にわたる仕事を紹介した、オランダテキスタイルミュージアムでの展示風景。東京でも展覧会が開かれる。  
 撮影＝ユイキヨミ

**ミナ ペルホネン展覧会「進行中」** 9月28日～10月20日

■ **スパイラルガーデン** 東京都港区南青山5-6-23 [www.spiral.co.jp](http://www.spiral.co.jp)

(p.117 上)

ショップ内の黒板には、皆川が描いた新作の図案と、そこから発想した詩が書かれている。

上・ドレス「**sleeping rose**」(2010-11 秋冬コレクション。皆川明デザインのリバティプリント) たくさんの薔薇の花が格子状に並べられた細密な柄のリバティ地に、木漏れ日のような柄を重ねたプリント。

下・ブラウス「**unforgettable moment**」(2010-11 秋冬コレクション。皆川明デザインのリバティプリント) 野の花が舞い、消しゴムで消したような痕を残したプリント柄。撮影＝茂木綾子 ミナ ペルホネン 2010-11 秋冬コレクション カタログ「**紋黄蝶**」より **右中**・服地と同じ生地のバッグと、洋服で発表してきた柄を生地を変えて表現したインテリアアブリック。 **右下**・菅原硝子とのコラボレーションによるグラス。左から **peanuts (clear)**、**peanuts (white)**、**whip**。